

ツイキャス読書会 課題図書 志賀直哉『小僧の神様』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 12 回のツイキャス読書会の課題図書は、志賀直哉の『小僧の神様』（新潮文庫 他）です。

今回もたくさんの応募がありました。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます

[朗読はこちらです。](#)

『小僧の神様 感想文』

貴族院議員のAは小僧がお腹が減ってお寿司を食べたくて手に取ったものの、持っているお金が足りなくてそれを戻すという恥ずかしい状況を見てしまって、自分はどうすべきだったのかすごく悩んだのだと思う。

小僧が手に取ったお寿司の代金を払ってあげても、それは良かったのか、どうか悩んだ気がします。

自分だったらどうする？ と考えてみてもハッキリと答えが見つからず、もやもやしたと思う。

だけど、小僧も少し恥ずかしいような気持ちを持ちながらも喜んでいた所もあったので、何も思わない人に比べたら小僧の事を気の毒に思ってお馳走してあげて良かったと思います。

(おわり)

小僧の神様の感想文

志賀直哉の「小僧の神様」を中学生のとき以来再読した。当時は「単純な話だなあ」と特に深く考えることもなく、長い間読み返すこともなかったが、志賀直哉の代表作とされていることから、書かれた時代から現代まで続く、読者に問いかけてくる問題が存在するのだと思って読んでみる。

まずAと仙吉との関係性について、身近に思い当たることは公共交通機関で健康な若者が高齢者や障害者に席を譲るかどうかで葛藤することに似ている。それは表面的には善い行いとみなされるであろうが、若さや健康という特権を持てる者が持たざる弱者へ施しをするというある種の一方的な暴力の構造としても捉えることができる。実際に「年寄扱いするな」と憤慨する高齢者もいるだろうし、持てる者が自身のナルシズムを満たしていると感じる者もいるだろう。

Aと仙吉との関係は上記のような一方的で一時だけの施しと言える。そんなことをしたところで仙吉は何も変わらず、貧しいままではないか、という批判もあるだろう。Aの感じた淋しさはそのような考えに基づく疚しさと言える。

実際には仙吉はAを神格化する。悲しいとき、苦しいときにAのことを考え、いつかまた自分の前に現れてくることを信じる。それが心の支えになって前に進めるかあるいは他力本願的な受身の姿勢になるかは仙吉次第だろう。

最後に「仙吉がAを尋ねていったところ稲荷の祠があったと書くのは仙吉に対して残酷な気がした」という文をわざわざ添えたことに何の意味を見出すか？ 祠があったとすると仙吉のAを神格化する思いを一層強めることになる。それは仙吉をよく言えば無垢な、悪く言えば単純バカのような、表層的な人物に仕立て上げてしまう。上で述べたAと仙吉との強者と弱者の対比をより際立たせてしまうからだろうか。

(おわり)

小僧の神様 感想文

この物語は、秤屋で奉公をしている仙吉と貴族議員 A が対になっており、二人とも勇気を出したが結果的に失敗してしまったお店での体験談としても読ませて頂きました。

まず仙吉の失敗だったことは、四銭あれば一つは鮪を食べると思っていたことと、海苔巻きがあるだろうと思ったこと。(なぜ鮪の鮪では無かったのだろう。高いとわかっていたからなんなのでしょう?)

さらに、海苔巻きが無いことにより、妙なプライドから鮪の鮪を一度は掴むが、鮪屋の主人から「一つ六銭だよ」と言われ、諦めなければならなかったこと。

勇気を出した事は、お金が足りないかもしれないけど、興味本位で鮪屋に入ったことだと思います。(初めて入るお店は緊張しますよね。特に美容院とか。)

一方、若い貴族議員の A の失敗は、鮪を食べられない小僧の話が貴族議員 B にしたところ、食べさせてやれと言われて秤屋で働く小僧を発見し、ご馳走しに行くも蕎麦屋、鮪屋、烏屋の前など通りすぎ小僧が失敗をした鮪屋へあえてピンポイントで連れてってしまったこと。(小僧に食べたい物や店を聞けば良かったのかも。)

あとは、秤を買った時に、自分の住所を書かなければいけない事を知らず、嘘の名前と住所を書かなければいけなくなってしまったこと。

貴族議員 A の勇気を出した事は、若いせいかご馳走することに馴れていなかったが小僧にご馳走したこと。

貴族議員 A のいい事をしたのにも関わらず、後ろめたさがあるのは、小僧が 100%喜んだかどうか確認出来ないことと、嘘の住所を書いた事により小僧の秤屋にも立ち寄れないまま終わってしまうことが切ない。

でも、いつか小僧が議員 A とどこかで出会えたらいいなあと思いました。

余談ですが、一度、失敗したお店は入りにくくなりますよね。

僕は神保町の本屋で、三島由紀夫のサイン本を見て、「凄いなあ」と触ろとしたところ、本屋店主に「買う気がないなら触るな!」と言われた経験があるので、その時の状況って、小僧と一緒にいたなあとしみじみ思いました。

(終わり)

『小僧の神様』 感想文 ～「場」違い～

この小説の読後、遠い記憶が呼び覚まされた。

私が学生の頃、小さなアパートの玄関先で、大きなお腹をした野良猫が鳴いていた。お腹を空かせているのはすぐにわかった。私はただ、可哀想という感情だけで食べ物をあげて・・・それで終わったはずだった。

しかし、それから度々玄関先でミャーミャー鳴くようになった。ついついまた食べ物をあげてしまう。すると、今度は小さな子猫たちを連れてミャーミャー合唱しだしたのだ。

飼い猫という「場」を与えてあげられない私は、耳を塞ぐことしかできなかった。

貴族院議員Aが仙吉に与えた善意は、決して悪いことだとは思わない。ただ、鮎屋に堂々と出かけられる番頭たちと違って、仙吉はあまりにも「場」が違い過ぎた。番頭たちもかつては小僧として奉公をし、徐々に今の「場＝ステージ」に辿りつき、鮎屋に似合う風格が出てきたのだ。ステージは飛び越えることはできない。身の丈に合っていないと、仙吉が勇気を出して入った鮎屋での恥ずかしい所作になってしまう。ひょっとしたら、鮎屋の主もそれがわかっており、あえて突き放したのかもしれない。

仙吉は自分にとって身に余る幸運が腑に落ちず、結局「神様」のおかげにしてしまう。人は自分の理解を超えたものに神をみてしまうのだ。

しかし、現実はそうではなかった。善意を与えた方のAも、仙吉とは違うベクトルで思い悩んでいた。Aは、確かに地位や金銭の面で仙吉に善意を与えられる立場だった。しかし、若さゆえか人に善意を与えられるステージにまだ辿り着いていなかったのではないか。自分が与えようとしている善意と人物のバランスを見極められるようになってこそ、Aも悩まずにすむと思うのだ。

仙吉もAも、これから飛び越えずに徐々にステージを上がっていけば、作者が最後に割愛したお稲荷様を拝まずに生きていけると信じている。

私も、野良猫にいつときの幸運を与えてしまった。小さなアパートで飼い猫にできる器もなかったのに・・・。今なら、安易で自己満足な善意は与えない。この野良猫たちにとって、何が一番よいことか考えるだろう。私も少しはステージがあがっただろうか。

(おわり)

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

【見返りを求めない『善行』】

鮪の鮨を手にとったけれどお金が足りずその場を走り去った小僧を、Aは気の毒に感じた。議員仲間のBから「おごってやったらよかったのに」と言われたAだったが、小僧に鮨をおごる行為は冷や汗ものだ、そういう勇氣はちょっと出せないと言った。

Aは偶然小僧に再開し、奢ってやる機会を得た。そして思い切って自分の思うようにやってみた。自分の素性は分からないようにするという設定は、貴族院議員という身分が匿名性を必要としたのだろう。

Aの「変に寂しい、いやな気持ち」は、自分の行為が結局は「金持ちが貧乏人の子をお腹いっぱい食べさせてやった」という、上から目線の自己満足だったと感じたからか。

誰かのために何か役に立ちたいという欲求は、程度の差はあれ誰もが持っていると思う。そして誰かのために役に立つことをするのは、とても勇氣がいることだ。私も、誰かのために役に立ちたいと思う事がよくある。しかし勇氣を出して行動に移しても、「同情された」と相手を傷つけてしまったり、第三者から偽善行為だと言われることもある。相手と対面で交渉成立していてもそのような事がおこるのだ。

では匿名にすれば相手の反応が返ってこないのもまだ気楽かと言うと実はそうでもなく、自分の行いはどうだったのだろうかとかモヤモヤ想像したり、受け取った相手だって喜んでいいのかわからなかったりで、本当に複雑だと思う。

世のため人のためは、実はあなたの自己満足だと言われてしまうと生きていても楽しくないし、この世の楽しさと感動の共有はすべてフィクションの世界になってしまう。

私は小僧が「只無闇とありがたかった」と受け止めてくれたことに、本当に救われた。心洗われた。小僧は私にとっての神様だ。同じようにこの世をはかなんでいる人が著者である志賀直哉に神を投影して、著者が「小説の神様」と呼ばれるほどになったとしたら…。(そんなことはないと思うが。) なんだか皮肉だ。

(おわり)

belougaさんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelougaのつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

私にとっての小僧の神様

高校時代の物理のある時間、その日の授業内容は「等速円運動」だった。物理教師であるK先生は、「円の中心に向かって物体に力が働いているから等速円運動をする」と言った。しかし、私にはそのイメージがつかめなかった。

その授業の後、K先生にじっくりこないことを伝えるとK先生は違う方面から説明をしてくれた。しかし、その説明では私は理解できなかった。それでも、手法を変え説明を続けてくれるK先生。そうした問答が何度も続いた後、ふと等速円運動のイメージが思い浮かんだのである。

理解のできたその日の私は、理解をできた自分自身を誇りに思い、理解に導いてくれたK先生の“説明”に感謝をしていた。

その日から15年以上経った今思い返すと、先生からもらった素晴らしいものは“等速円運動の説明”ではなく、何度も何度も手を変え品を変え説明してくれた“理解させてやろうという熱意”なのではないかと感じている。はっきり言ってその時の私は「自力で調べろ」と切り捨てたくなるくらいしつこく聞いていた。

高校生だった私は、まさに旨い鰯を腹一杯食って満足した仙吉であった。当時の私は“等速円運動の説明”で満足しきっており、付き合ってくれたK先生の素晴らしさまで理解していなかった。

仙吉は自分なりに考えて、「本当のおくりものは“腹一杯の鰯”ではなく、その背後にある“優しい気持ち”なのではないか」ということに行きついたのではないだろうか。だからこそ再び鰯屋に足を運ばなかったように思う。

私も仙吉のように（といっても15年もかかってしまったが）、贈った当人も気がついていないであろう“本当の贈り物”に気がついた。

人が誰かに何かをしてあげるとき、腹一杯の鰯のような現実的な価値の背後に、もっと崇高で普遍的な価値あるものが存在するのではないだろうか。当人すらも気がついていないその価値あるものは然るべき時に相手に伝わるのではないだろうか。

『小僧の神様』を読み、そのようなことを感じた。

(おわり)

小僧の神様 感想文

Aさんが仙吉におごってあげた後何だか寂しく感じたというのは、わかる気がします。実は私も似たような気持ちになった経験があります。スーパーで賞味期限ぎりぎりまで食パンが8割引きで売られていた時それを3個買い、「有難う。」と何回も言って見える方がいました。以前に数回見かけたことがある方でいつも商品をじっと見るだけで買わずに帰られていました。偶然に外でお会いした時は、リヤカーに販売機や収集場の空き缶をたくさん積んで歩いていました。数日後にまた外で見かけたとき、私は買い物帰りだったので、つい菓子パンを「余分に買ったのでどうぞ」と言ってしまいました。すると「悪いですね。有難うございます。時々お見掛けしますね」と、とても丁寧にお礼を言われました。正直言葉の良さに驚きました。家に帰ってから自分のしたことは自己満足の偽善であったのではと悩みました。それからスーパーで会わなくなりました。彼のプライドを傷つけたことを後悔し、元気であることを願いました。

そして2年後少し離れた場所でまた彼がリヤカーを引いているのをみました。私のことは覚えていないだろうと思って近づくと、彼は私を見るなり目をまん丸にして見ました。ドキッとしながら「大変ですね。重くないですか？頑張って見えますね。」と声を掛けると「重くないよ。おまんま食べないといけないから」と言われました。その時の顔は生き生きと輝いていました。パンを渡した時とは明らかに表情が違いました。

私は、正しく生きようとしている方に、勘違いの親切はしてはいけないと自分を戒めました。

Aさんが寂しく思ったのは、自己満足と親切の判断で悩まれたからではないでしょうか？

(終わり)

『本統のころ』

(引用はじめ)

A は変に淋しい気がした。自分は先の日小僧の気の毒そうな様子を見て、心から同情した。そして、出来る事なら、こうもしてやりたいと考えていた事を今日は偶然の機会から遂行出来たのである。小僧も満足し、自分も満足していい筈だ。ところが、どうだろう、この変に淋しい、いやな気持ちは。何故だろう。何から来るのだろう。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持ちに似通っている。若しかしたら、自分のした事が善事だという変な意識があって、それを本統の心から批判され、裏切られ、嘲られているのが、こうした淋しい感じで感ぜられるのかしら？

(引用おわり)

作者はなぜ、『本当』ではなく『本統』という言葉を使ったのだろうか？

『正統性 legitimacy レジティマシー』という言葉がある。これは、「(社会で) 統一的な根拠を持っていること」という意味があるのだが、法哲学者の井上達夫氏の著書では、正統性の二条件を以下のように定義していた。

1. 敗者が、次のラウンドで勝者になるチャンスがゼロではないこと
2. どんな無力な個人の基本的人権 (自由・権利・尊厳) も侵害してはいけないこと

貴族院議員 A が秤屋の仙吉に鯨をおごる行為は、

1. いつか仙吉に、お礼に鯨をおごるチャンスを与えていない
(匿名で鯨をおごってしまうと、小僧は、A にお礼できる可能性がない)
2. 仙吉の基本的人権をどこか軽視していること
(A は、仙吉を気の毒な「小僧」と決めつけて、彼が自分の金で屋台の鯨を食う可能性を奪ってしまった)

というこの二点において、正統性が担保されていない。

だから、『本統の心』が A を批判してきて、淋しい気がするのである。もし仮に、A が仙吉の立場になったとき、鯨を奢られたら、お礼ができないことを後ろめたく思うだろうし、また、屋台の鯨を独力で味わう喜びを奪われたと感じたはずだ。仙吉の神様としての A には、正統性はない。だが、お稲荷様がオチだったら、小僧の神様には、正統性がある。お稲荷様は食べ物の神様だから。

(おわり)

※参考文献 『リベラルのことは嫌いでも、リベラリズムは嫌いにならないでください。』

井上達夫著 毎日新聞出版社

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

小僧の神様 あらすじ (wiki より)

神田の秤屋で奉公をしている仙吉(小僧)は、番頭達の話で聞いた鮎屋に行ってみたいと思っていた。ある時、使いの帰りに鮎屋に入るものの、金が足りずに鮎を食べることができない仙吉を見かけた貴族院の男(A)は、後に秤屋で仙吉を見つけ、鮎を奢る。

鮎を奢られた仙吉は「どうして番頭たちが噂していた鮎屋をAが知っているのか」という疑問から、Aは神様ではないかと思い始める。仙吉はつらいときはAのことを思い出しつつかまたAが自分の前に現れることを信じていた。一方Aは人知れず悪いことをした後のような変に淋しい気持ちが残っていた。

ちなみに本文の十節には「『Aの住所に行ってみると人の住まいが無くそこには稲荷の祠があり小僧は驚いた』というようなことを書こうかと思ったが、そう書くことは小僧に対して少し惨酷な気がしたため、ここで筆を擱く」というような擱筆の文が挿入されている。

【ご参考までに】

お稲荷さんの主祭神、宇迦之御魂神(ウカノミタマノカミ 倉稲魂命 うかのみたまのみこと 稲荷大明神)は、神階として最高位の正一位(しょういちい)で食べ物の神様です。